

聖霊降臨後第15主日（特定19） 「赦し」ということ

2年ほど前に、長田弘という、福島出身の詩人で児童文学者が亡くなりました。この人は、長く NHK の視点論点、という番組で、エッセイのようなお話を1年に何回かしていました。そして4年前に、岩波新書（赤の1414番）ですが「なつかしい時間」というタイトルにまとめて、出版しています。

私がこの人の話を初めて聞いたのは、今から9年前、2008年の9月11日でした。その時のお話のタイトルは、「死者と語らう」というテーマでした。約10分間の話でしたが、大変興味深く見ました。その放送の話も、この本の中に入っていたので、改めて読んでいたりしているのですが。

9年前、テレビでそのタイトル「死者と語らう」というのを見て、「死んだ人と、どのように話をするのか、まさか霊媒師のような話ではないだろう、」と思って聞いていますと、彼は、以前親しくしていた人で、今は亡くなった人との、思い出の場所。彼の場合は、京都河原町三条の交差点に行くと、しばらくそこに立っていると、以前親しくしていた人と出会えるような経験をするので、時々そこに行く、と言うのです。

そして、そのような特定の場所というのが、それぞれ、わたしたちみんなにはあって、そこで、以前生きていた人のことを思う時、何か自分に語りかけてくれるようなものがある。それが、墓だったり、海だったり、お祭りだったり、あるいはその人が書いた本だったりすることもある。

長田さんが言うには、

人間は、自分が書き残しているかどうかは別にして、みんな死んだ人は、この世に本を残している。「本」という漢字は、木の根に近い所を指すので、木の下の方に一本横線を引くのですが、「おおもと」「始まり」とか言うように、規範となるもの、主たるもの、本来のものなどを指す言葉らしい。私たちは、特定に場所に行くと、その人の本を読むことになる、と言うのです。そして、亡くなった人から、私たちは多くのことを聞く時、現在の自分を変えられるような体験をする。そして、この人が締めくくりに、何度も言って印象に残った言葉が「よく生きた人の言葉は死なない」というものでした。

私は、「人間はみんな死ぬ時に、1冊の本を残す。」ということ、そして「よく生きた人の言葉は死なない」ということが、大変心に残りました。

というのは、アフリカの諺に、(以前国連アナン事務総長が開会スピーチで紹介した)「アフリカでは、一人の老人が死ぬと一つの図書館がなくなる」というのがありました。死んだら本を残す、というのと、死んだら図書館が亡くなる、というのは、まるで逆の話のようですが、人間の存在を本にたとえるのは、同じことを言っているようにも思えました。

そして、もうひとつは、マタイ24：35「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」というイエス様の言葉を思い出したから印象的でした。

ここまで、長い導入の話をしました。それは、今日読んだ、旧約聖書続編、シラ書（ベン・シラの知恵、とか集会の書とか言われている書物）のことを言いたかったのです。

イエス様が生まれる190年くらい前、イスラエルの都エルサレムに、「シラ・エレアザルの子、エルサレムに住むイエス」という人がいました。学者の彼は各地を旅行し、学校を開いて子どもたちを教えたのですが、地中海沿岸のギリシャ・ローマの思想、ヘレニズムの文化に影響されてしまう若い世代に、自分たちヘブライズム、ユダヤの思想を伝えようとして書いたのが、このシラ書です。そしてその後、約60年くらいして、紀元前132年、このイエスの孫がエジプトで、それをギリシャ語に訳しました。その時の翻訳の苦勞を、シラ書の1章が始まる前に「序言」として書いています。

聖公会では、聖書と言えば、他のプロテスタント教会と同様に、旧約39巻と新約27巻合わせて66巻を聖書の正典としていて、聖書は「救いに必要なすべての事柄を載せている。」と定義しています。

ところが、カトリックにも気を遣っているのか、現在旧約続編と言われて、新共同訳に載せられている書物も礼拝で読みます。これについては、イギリスの三十九箇条という聖公会の立場を述べた文章では、「生活上の規範と道徳上の教訓のために読むが、それらを根拠としてどのような教義をも定めることはしない。」という主張をして、信仰の指針にしているわけです。

私はこのシラ書を読んで感心してしまいました。今日の福音書でイエス様が話されたたとえ話を、それが語られる200年も前に、エルサレムに住んでいた、シラ・エレアザルの子、イエスが、ほぼ同じような内容で書き記し、言い当てているように思えたのです。

今日の福音書は、弟子のペトロが、「兄弟が罪を犯した場合、何回赦すべきか。」という質問をします。それに対して、イエス様は、ペトロの言う7回を70倍するまで、と答えておられます。これは、「490回まではいいが、491回目はダメだよ。『これで何回目だ』」というふうに数えるのではなく、無制限に赦しなさい、という意味です。というのは、その後で話されたたとえ話では、もはや赦す回数の話にはなっていないのです。

金額こそ、1万タラントと100デナリオンという差があります。王様が家来の借金を帳消しにした額が、約6000億円であるのに対して、100万円という程度差があります。しかし、このたとえ話で、イエス様は、「何回、どこまで赦したらいいのか」という、問題ではなく、「なぜ赦さなければならないのか」ということを問題にしておられるのです。1万タラントと100デナリオンでは、6千万倍の差があります。これは、私たち人間が、自分の力では、到底働いても返せないぐらい、大変な負い目を神様から赦していただいている。だから、私たちも、仲間の罪を赦してやるのは、あたりまえじゃないか。6000万分の1なんだぞ、と言われているのです。

今日のシラ書は、小見出しが「憤り」となっていて、2節から5節まで、各節は、すべて私と隣人、私と神様の関係を対比して、隣人の罪を赦さなければ、私自身も神様から赦されない、そんな今日のたとえ話と同じことを何回も語っています。ただ、しかし、それなら私たちがすんなり、隣人の罪を赦せるか、ということになれば、そうはいかない、現実の問題があります。

もう1か月も前の話ですが、この数年間に群馬大学病院で行われた腹腔鏡手術で、多くの人が亡くなった事件で、執刀した医師と被害者の遺族が対面した話がありました。こんな時、私たちも、その医師のことを、すんなり「謝っているんだから赦してやったらいいじゃないか。」とはいえない感情があります。

森友学園の容疑者夫婦が逮捕されたニュースは、この夫婦だけでなく、政府や大阪府とか豊中市との関連を知ってゆくと、私たちは、「赦してやろう」などと簡単に言えない筈です。

もちろん、ここにイエス様がおられたら、私たちに向かい、手に石を持って、「お前たちの中で、罪のない者が最初に石を投げろ。」と言って、怒りを抑えるように促されると思います。

しかし、私たちが、罪を犯した人に対して、赦すことができるとしたら、それは「人にはできないが、神にはできる。」という、恵みと申しましょか、神様からの力が働いた時に、初めてできることではないか、と思うのです。

今日の、イエス様より200年前に活動していた、エルサレムのイエス君は、今日のシラ書の最後に、「掟を忘れず、隣人に対して怒りを抱くな、いと高き方の契約を忘れず、他人のおちどには寛容であれ。」と書き残しています。

「他人のおちどには寛容であれ」

これは、厳密に言えば、聖書の言葉ではありませんが、「よく生きた人の言葉は死なない。」と詩人の長田さんが言うように、イエスの経験の中で、私たちに伝える言葉として、今も示されているように思えます。

この寛容さを私たちが身につけてゆく中で、少しずつ、他人の罪を赦せるものになってゆけるのではないか、と私は思うのです。